

業計画書

基本情報	科目名称	心理学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	前期	1年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	中山 麻子					中山 麻子

教科書	生活にいかす心理学 ver. 2 ナカニシヤ出版
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	パーソナリティ、心の健康、集団心理、学習と記憶等、心理学の基礎知識を学ぶ。 グループワークも実施し、ディスカッションを行う。
到達目標	心理学の基礎知識を習得する。 自己理解および他者理解を深め、コミュニケーション力を身につける。
準備学習の内容	ディスカッションのテーマを事前に告知し、自身の考えを深めておく。
授業期間全体を通じた授業の進め方	基礎知識の習得を行う。グループワークではディスカッションを通し、コミュニケーション力、思考力を高めていく

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	心理学の概要 心理学とは。心理学の方法
2	知覚と感覚① 知覚の成り立ち
3	知覚と感覚② 知覚の諸相
4	経験の働き① 反射と学習、学習のメカニズム
5	経験の働き② 記憶と忘却
6	人間の空間行動① パーソナル・スケール
7	人間の空間行動② 生活空間の認知
8	パーソナリティ① 自分らしさとは。パーソナリティの分類
9	パーソナリティ② パーソナリティ検査、心理テスト、その人らしさの成り立ち
10	心の揺らぎ① 健やかな心とは。心が揺れるとき、心の危機
11	心の揺らぎ② 心の健康について
12	人との関わり① 対人認知、対人魅力
13	人との関わり② 説得と態度変容、援助行動、攻撃行動
14	集団について① 集団の特徴、リーダーシップ理論
15	集団について② 集団間葛藤の解決
16	コミュニケーション行動① コミュニケーションとは
17	コミュニケーション行動② 非言語的コミュニケーション
18	情報と人間行動 ネットワーク社会での情報行動
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	薬理学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	前期	1年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	木村 麻記					木村 麻記

教科書	『いちばんやさしい薬理学』 成美堂出版 まとめ問題集(講師作成)
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	スライドまたは板書による講義
到達目標	薬物の作用点、薬物動態、薬効に影響を与える因子、各治療薬について理解し、説明できる。
準備学習の内容	次回の講義内容に該当する教科書の範囲を読む
授業期間全体を通じた授業の進め方	講義を行い、期間中に形成的評価を1回実施する

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点~80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点~70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点~60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点~0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	1 薬理学の基礎 医薬品の分類、薬物療法の目的について説明できる
2	1 薬理学の基礎 薬物の投与経路と剤形について説明できる
3	2 薬理学各論 抗炎症薬について説明できる
4	2 薬理学各論 抗炎症薬について説明できる
5	2 薬理学各論 解熱鎮痛薬について説明できる
6	2 薬理学各論 循環器系（血圧・心疾患）の薬について説明できる
7	2 薬理学各論 循環器系（止血・抗血栓・抗貧血）の薬について説明できる
8	2 薬理学各論 循環器系（止血・抗血栓・抗貧血）の薬について説明できる
9	2 薬理学各論 糖尿病治療薬について説明できる
10	2 薬理学各論 骨粗鬆症治療薬について説明できる
11	2 薬理学各論 消毒薬について説明できる
12	3 薬理学総論 薬物の用量と作用メカニズムについて説明できる
13	3 薬理学総論 薬物動態（吸収、分布、代謝、排泄）について説明できる
14	3 薬理学総論 薬物動態（吸収、分布、代謝、排泄）について説明できる
15	3 薬理学総論 薬物動態（投与経路の違いと血中薬物濃度の変化）について説明できる
16	3 薬理学総論 薬物相互作用について説明できる
17	3 薬理学総論 薬効に影響を与える因子について説明できる
18	まとめ
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生物学 a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	通年 (前期)	1 年	4	80 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	澁川 義幸					澁川 義幸

教科書	『生物学』講義資料 (講師作成)
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	板書による解説、スライドを用いた解説 電子黒板を活用したスライドと板書のハイブリット講義
到達目標	生体の動物性機能と植物性機能の柔道整復学における重要性を理解し、対象疾患の病態と療法の生理学的基盤を説明できる。
準備学習の内容	講義予定部 (シラバス参照) の教科書の講読
授業期間全体を通じた授業の進め方	電子板書による講義を行う。形成的評価 (前後期 2 回) を実施する。各試験前と後には、まとめ講義を実施する。前後期それぞれの定期試験結果より総括評価行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は 80% 以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100 点～80 点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79 点～70 点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69 点～60 点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59 点～0 点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100 点満点中 60 点以上合格 平常点 0 点またはマイナス 10 点		

授業計画

1	生体の最小構成単位を説明できる：元素記号を覚える事が出来る
2	生体の最小構成単位を説明できる：体液（血液）を構成するイオンを説明できる
3	生体の最小構成単位を説明できる：体液（血液）を構成する溶液濃度を説明できる
4	生体の最小構成単位を説明できる：体液（血液）の水素イオン濃度を説明できる
5	生体の最小構成単位を説明できる：呼吸と排泄に関連する Henderson-Hasselbalch の式を説明できる
6	生体の最小構成単位を説明できる：体液（血液）の浸透と浸透圧を説明できる
7	3 大栄養素を説明できる：3 大栄養素と消化機能を説明できる
8	糖質を説明できる：栄養素としての単糖・二糖・多糖について説明できる
9	タンパク質を説明できる：栄養素としてのアミノ酸を説明できる ペプチド結合を説明できる
10	脂質について説明できる：栄養素としての脂肪酸を説明できる
11	核酸を説明できる：DNA と RNA を説明できる
12	代謝：異化と同化を説明できる
13	代謝を説明できる：生体のエネルギーである ATP 生成を説明できる
14	代謝：糖代謝・タンパク質・脂質・核酸代謝を説明できる
15	代謝：タンパク質・核酸代謝を説明できる
16	代謝：脂質代謝を説明できる
17	まとめの講義
18	まとめの講義
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生物学b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	通年（後期）	1年	(4)	80 (40)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	澁川 義幸					澁川 義幸

教科書	『生物学』講義資料（講師作成）
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	板書による解説、スライドを用いた解説 電子黒板を活用したスライドと板書のハイブリット講義
到達目標	生体の動物性機能と植物性機能の柔道整復学における重要性を理解し、対象疾患の病態と療法の生理学的基盤を説明できる。
準備学習の内容	講義予定部（シラバス参照）の教科書の講読
授業期間全体を通じた授業の進め方	電子板書による講義を行う。形成的評価（前後期2回）を実施する。各試験前と後には、まとめ講義を実施する。前後期それぞれの定期試験結果より総括評価行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	細胞構造と機能を説明できる：細胞膜構造、細胞内小器官
2	細胞構造と機能を説明できる：細胞膜構造、細胞内小器官
3	細胞構造と機能を説明できる：遺伝・生殖と細胞分裂
4	細胞構造と機能を説明できる：細胞分裂
5	細胞構造と機能を説明できる：体細胞分裂
6	細胞構造と機能を説明できる：減数分裂
7	生理学概論：組織構成と細胞を説明できる
8	生理学概論：上皮組織と腺組織：上皮を説明できる
9	生理学概論：上皮組織と腺組織：外分泌と内分泌を説明できる
10	生理学概論：支持組織を説明できる
11	生理学概論：筋組織：骨格筋を説明できる
12	生理学概論：筋組織：骨格筋を説明できる
13	生理学概論：筋組織：平滑筋・心筋・循環器を説明できる
14	生理学概論：神経組織：中枢神経系を説明できる
15	生理学概論：神経組織：末梢神経系を説明できる
16	生理学概論：神経組織：ニューロン構造を説明できる
17	まとめの講義
18	まとめの講義
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	健康科学			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	後期	1年	2	40
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	土反 康裕					土反 康裕

教科書	『これからの健康科学』
参考文献・資料等	特になし

授業の方法及び内容	人間・環境・社会のつながりを「健康」を通して科学していく。
到達目標	健康科学とは「健やかに老いる」ためにどのようにすればよいか、すべての分野を視野に入れ健康論を理解する。 健康とは何か、健康科学の概要を理解し、説明ができる。 食事と運動による健康増進・環境と健康を理解し、説明ができる。
準備学習の内容	統計から健康を捉える。 運動生理学、栄養学の基礎を学ぶ。
授業期間全体を通じた授業の進め方	予防観点（運動・栄養・休養）から健康を支えるための実践知の意義を学ぶ。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	生物学から学ぶ健康科学の概要
2	統計からみた健康①
3	統計からみた健康②
4	統計からみた健康③
5	肥満と生活習慣病
6	栄養①（代謝と栄養）
7	栄養②（ダイエットと競技力向上）
8	運動と健康（運動生理学とトレーニング理論の基礎）
9	運動プログラムの作成①
10	運動プログラムの作成②
11	喫煙と飲酒
12	加齢と健康
13	感染症
14	アレルギー性疾患
15	環境と健康（病原体と免疫）
16	環境と健康（紫外線の影響、大気汚染と健康、公害）
17	ストレスと健康①（メンタルヘルス）
18	ストレスと健康②（メンタルヘルス）
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	英語			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	後期	1年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	高瀬 愛子					高瀬 愛子

教科書	English for Care and Hospitality I
参考文献・資料等	自作のプリント(医学英語入門 朝倉書店を中心として参考書多数を参考とした)を用いる。

授業の方法及び内容	テキストを用いて、これを基本として読み進めていく。その中でみられる文法をピックアップしてプリントを用いて進めていく。
到達目標	医療スタッフになるための実務的英語力を身に付ける。
準備学習の内容	次回に学習する箇所を予告してテキストに目を通させる。
授業期間全体を通じた授業の進め方	語学は黙って講義を聴くということではなく、言葉として声を出して発表や、音読を重視して行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点~80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点~70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点~60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点~0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	Unit8 Introduction(p32~35) Print1
2	Unit8 month date weather
3	(p30~31) Useful words Parts of the body Print2
4	(p30~31) 1 医学英語の基本 接頭語 接尾語 Print3
5	1~4 回の復習
6	Unit1 Print4 数詞等
7	Unit2 Print5 助動詞
8	Unit2 後半 Print6 名詞
9	Unit3
10	Unit4 Print7 疑問詞の使い方
11	Unit5 Print8 命令文を使う
12	6~11 回の復習
13	物語文を読む Print9
14	名詞、冠詞の使い方
15	不定詞1 Print10
16	不定詞2 Print10
17	Unit6
18	Unit7 期末試験前の総合学習
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	情報リテラシー			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	基礎分野	講義	前期	1年	2	40
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	指田 聡子					指田 聡子

教科書	『Windows10 対応 30 時間でマスター Office2016』
参考文献・資料等	なし

授業の方法及び内容	情報化・デジタル時代のビジネスに不可欠な基本的なビジネスソフト（Office2016）の使い方を学ぶ。
到達目標	将来、役に立つ医療情報の入手や検索の方法、ビジネス文書作成、データ集計・分析を習得する。
準備学習の内容	事前学習として、テキストをよく読み、パソコン操作の手順を覚える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	授業は、全体で基本操作をやり理解した後に、各自で実習問題を取り組み、完成したデータを提出。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100 点満点中 60 点以上合格 平常点 0 点またはマイナス 10 点		

授業計画

1	授業の進め方と注意事項、キーボード、マウス、ローマ字入力について
2	Windows10 の基礎、Word2016 起動、画面説明
3	Word2016 ファイルの保存と読み込み、ページ設定、文書作成、文字の拡大と縮小、文字の装飾
4	Word2016 表を活用したビジネス文書の作成（基本的な操作）
5	Word2016 表を活用したビジネス文書の作成（応用的な操作）
6	Word2016 画像を活用した文書の作成（基本的な操作）
7	Word2016 画像を活用した文書の作成（応用的な操作）
8	中間試験
9	Excel2016 起動、終了、データ入力、計算式の入力
10	Excel2016 基本的なワークシート編集
11	Excel2016 関数の利用 (Sum, Average, Max, Min)
12	Excel2016 関数の利用 (Count, Counta)、罫線
13	Excel2016 グラフ
14	Excel2016 条件判定 (If)
15	Excel2016 相対参照と絶対参照、関数の利用 (Rank)
16	Excel2016 関数を利用した検索 (Vlookup)
17	Excel2016 総復習
18	期末試験
19	試験の総括（試験問題の解答・解説）
20	Excel2016 Excel の便利な機能（セルの条件付き書式、並べ替え、フィルター等）

授業計画書

基本情報	科目名称	解剖学 I a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年 (前期)	1 年	4	80 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	杉山 渉					杉山 渉

教科書	『解剖学』南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	専門知識に対して初学の方が多いため、難しい専門用語を覚えてもらうことを心がけ、解剖学の面白さを知ってもらうことで学習意欲を高めていく。
到達目標	基礎知識として骨、筋の名称や動きを身につけてもらい、2年以降の教科の礎を築いてもらう。
準備学習の内容	解剖学に興味を持ってもらえるよう様々なトピックスを提供し、それにまつわる書籍等を紹介し知識を増やしてもらう。
授業期間全体を通じた授業の進め方	区切りのいい所で、確認のための小テストを何回か行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 50 点、確認のための小テストを 50 点とし、合計で 100 点満点とする。		

授業計画

1	解剖学の概要、分類
2	解剖学の用語説明
3	細胞：形態と内部構造
4	細胞周期、細胞分裂
5	組織の分類と特性
6	人体の発生：生殖細胞
7	人体の発生：性染色体と性決定
8	器官の概要
9	人体の区分
10	骨格系：骨の役割、形状の分類
11	骨の構造、発生と成長
12	骨：脊柱
13	骨：胸郭
14	骨：上肢骨
15	骨：上肢の関節
16	骨：下肢骨
17	骨：下肢の関節
18	骨：頭蓋
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	解剖学 I b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年 (後期)	1 年	(4)	80 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	杉山 渉					杉山 渉

教科書	『解剖学』南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	専門知識に対して初学の方が多いため、難しい専門用語を覚えてもらうことを心がけ、解剖学の面白さを知ってもらうことで学習意欲を高めていく。
到達目標	基礎知識として骨、筋の名称や動きを身につけてもらい、2年以降の教科の礎を築いてもらう。
準備学習の内容	解剖学に興味を持ってもらえるよう様々なトピックスを提供し、それにまつわる書籍等を紹介し知識を増やしてもらう。
授業期間全体を通じた授業の進め方	区切りのいい所で確認のための小テストを何回か行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率 80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100 点～80 点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79 点～70 点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69 点～60 点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59 点～0 点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 50 点、小テスト 50 点とし計 10 点満点とする。		

授業計画

1	筋：骨格筋
2	筋：頭部の筋
3	筋：頸部の筋
4	筋：頸部の筋
5	筋：胸部の筋
6	筋：胸部の筋、呼吸運動
7	筋：腹部の筋
8	筋：腹部の筋
9	筋：背部の筋
10	筋：背部の筋
11	筋：上肢の筋
12	筋：上肢の筋
13	筋：下肢の筋
14	筋：下肢の筋
15	脈管系：総論
16	脈管系：心臓
17	脈管系：心臓
18	脈管系：肺循環、体循環
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生理学 I a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年（前期）	1年	4	80（40）
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	山 美喜子					山 美喜子

教科書	『生理学』南江堂 改訂第4版
参考文献・資料等	人体の正常構造と機能 日本医事新報社 病気がみえる

授業の方法及び内容	臓器器官の構造、働きについて解説し、国家試験形式の演習を行う。
到達目標	上記項目の柔道整復師にとっての重要性を理解すると同時に、国家試験の出題傾向を把握する。
準備学習の内容	授業と関連した内容の事前課題の取り組み。
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎授業ごとに理解度の確認のための小テストを行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	1 生理学とは 細胞膜を介した物質移動①
2	1 生理学とは 細胞膜を介した物質移動②
3	1 生理学とは DNA の構造と働き 染色体とは
4	1 生理学とは 細胞（内）小器官 種類と働き
5	1 生理学とは 上皮組織と非上皮組織 フィードバックとは
6	1 生理学とは 体液の区分と組成 ホメオスタシスとは
7	2 筋の生理 筋の分類 骨格筋 働き 構造
8	2 筋の生理 骨格筋の収縮と弛緩 興奮収縮連関
9	2 筋の生理 筋線維の分類 筋収縮の種類①
10	2 筋の生理 筋収縮の種類② 筋の長さや張力
11	3 神経の生理 神経系の分類 ニューロンとは 支持細胞とは
12	3 神経の生理 静止膜電位と活動電位
13	3 神経の生理 興奮の伝導 興奮の伝達 シナプスとは
14	3 神経の生理 興奮の伝達 神経伝達物質 種類と働き
15	3 神経の生理 脳の構造 大脳皮質の機能局在
16	3 神経の生理 睡眠と脳波 自律神経系 特徴 構造
17	3 神経の生理 自律神経系の調節①
18	3 神経の生理 自律神経系の調節②
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	生理学 I b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	通年（後期）	1年	(4)	80(40)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	山 美喜子					山 美喜子

教科書	『生理学』南江堂 改訂第4版
参考文献・資料等	人体の正常構造と機能 日本医事新報社 病気がみえる

授業の方法及び内容	臓器器官の構造、働きについて解説し、国家試験形式の演習を行う。
到達目標	上記項目の柔道整復師にとっての重要性を理解すると同時に、国家試験の出題傾向を把握する。
準備学習の内容	授業と関連した内容の事前課題の取り組み。
授業期間全体を通じた授業の進め方	毎授業ごとに理解度の確認のための小テストを行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	4 運動の生理 中枢神経系の運動調節 運動神経の種類 運動単位
2	4 運動の生理 脊髄での運動調節① 伸張反射の仕組み 関与する受容器 筋紡錘の構造と働き
3	4 運動の生理 脊髄での運動調節② 伸張反射の種類 筋電図
4	4 運動の生理 脳幹での運動調節 脳幹反射 小脳の構造と働き
5	4 運動の生理 大脳基底核の構造と働き 運動野
6	5 感覚の生理 感覚の種類 性質 特殊感覚とは 視覚（眼の構造と働き、伝導路）
7	5 感覚の生理 聴覚、平衡感覚（耳の構造と働き、伝導路）味覚、嗅覚（特徴）
8	5 感覚の生理 体性感覚とは 皮膚感覚 深部感覚 痛覚①（特徴、受容器）
9	5 感覚の生理 痛覚②（発痛物質、伝導路） 6 内分泌 内分泌とは ホルモンの分類
10	6 内分泌 下垂体のホルモン 階層支配とは 視床下部のホルモン
11	6 内分泌 バゾプレッシンの作用 甲状腺のホルモン（種類）
12	6 内分泌 甲状腺ホルモンの作用 カルシトニンとパラソルモンの血中Ca ²⁺ 濃度の調節
13	6 内分泌 副腎皮質のホルモン（種類と働き）
14	6 内分泌 副腎髄質のホルモン（特徴、種類と働き）
15	6 内分泌 膵臓のホルモン 内分泌による血糖値、血圧の調節
16	7 生殖 性分化 男性生殖器（構造と働き）男性ホルモンの作用
17	7 生殖 女性の生殖 関与するホルモン 性周期
18	7 生殖 妊娠と分娩 胎盤の機能（産生されるホルモンとその働き）
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	衛生学・公衆衛生学 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	後期	1年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	若山 葉子					若山 葉子

教科書	『衛生学・公衆衛生学』 南江堂
参考文献・資料等	国民衛生の動向 2023/2024 厚生労働統計協会

授業の方法及び内容	テキストを中心に、スライド・参考資料を用いて講義を行う。直近の公衆衛生学的話題、社会の動向についても解説を加える。適宜小テスト等を実施し理解度を確認する。
到達目標	将来地域社会で保健・医療・福祉の一端を担うにふさわしい、公衆衛生学的学識と教養を確実に身につけ、国家試験合格を目指す。自身の社会的役割・責任・貢献等について理解し考えを深める。
準備学習の内容	予定される授業内容のテキスト範囲に目を通し、授業展開の概要を把握する。他の基礎科目との関連についても理解しておく。保健・医療・福祉分野の社会的動向等について、種々のメディアを通して情報を受け止めておく。
授業期間全体を通じた授業の進め方	一方向の知識・情報の伝達ではなく、双方向の意思疎通をはかり、学生の理解度を確認しながら進める。 国家試験の動向・傾向を踏まえ、ポイントを示唆する。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	衛生学・公衆衛生学の概要：健康の概念 平均寿命と健康寿命 生活と健康 公衆衛生活動（プライマリヘルスケア・ヘルスプロモーション）
2	健康の定義 国際疾病分類 国際生活機能分類 健康の測定（1）人口静態統計-国勢調査（人口構造 人口指標 人口の推移・将来予測）
3	健康の測定（2）人口動態統計 出生をもとにした指標（合計特殊出生率） 死亡をもとにした指標（死亡率・死因別死亡） 生命表（平均余命） 婚姻 離婚
4	健康の測定（3）疾病・傷害統計 国民生活基礎調査 患者調査 わが国の疾病構造
5	疾病の予防と健康管理（1）：予防の3段階 生活習慣の現状と対策 健康づくり（健康日本21）
6	疾病の予防と健康管理（2）：集団検診 スクリーニング検査の精度
7	主要疾患の要因と予防： がん 循環器疾患 代謝疾患 骨疾患 運動器の障害
8	感染症の予防（1）感染症成立の要因 感染症の種類（ウイルス感染症 細菌感染症）
9	感染症の予防（2）主な感染症 最近の発生動向 院内感染
10	感染症の予防（3）感染症予防対策（成立要因別の対策 感染症法に基づく対策 院内感染対策） 予防接種 検疫
11	消毒（1）消毒実施上の注意 消毒の種類（物理的消毒法 化学的消毒法）
12	消毒（2）消毒の応用 手指の消毒 施術における消毒 院内感染対策（スタンダード・プリコーション）
13	環境保健（1）人間と環境 食物連鎖 地球環境問題（温暖化） 公害
14	環境保健（2）環境問題（現状） 大気汚染 水質汚濁 騒音 環境行政
15	環境保健（3）環境要因と健康（気温・気圧・騒音・放射線）
16	生活環境衛生：上水道 下水道 住居 廃棄物
17	食品保健：栄養（現状と対策） 食中毒（食中毒の種類・発生状況 予防対策） 食品の安全対策
18	学期のまとめ 重要事項確認
19	期末試験
20	試験解説 まとめ

授業計画書

基本情報	科目名称	医学史			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	講義	前期（前半）	1年	1	20
	授業担当者			実務経験		成績評価責任者
	加藤 稔啓					加藤 稔啓

教科書	「柔道整復学理論第7版」南江堂 「医療概論」医歯薬出版株式会社
参考文献・資料等	他に必要な内容は、プリントや板書を用いて学習を進める。

授業の方法及び内容	講義形式で進める。柔道整復の成り立ちとして、まず柔道整復術の中世から近代に至る歴史を学ぶ。更に現代に至る道のりについて法制度化を中心にみながら、学習をすすめる。
到達目標	医学史を学ぶ重要性を理解して、柔道整復の成り立ち、柔道整復の現代的意義を理解し説明ができる。生涯学び続け、向上する柔道整復師としての資質を身につける。
準備学習の内容	復習が重要。授業を受けたその日のうちに①教科書を読み返す②ノートをまとめる③練習問題を見直す などをして欲しい。
授業期間全体を通じた授業の進め方	全体として講義形式で進めるが、適宜グループワークを行う。小テストも実施する。欠席はたとえ一回であっても貴重な学習機会を失うことになる。安易に休まない。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	<input type="radio"/> この授業の進め方+計画確認 <input type="checkbox"/> 現在の柔道整復師① “柔整”の姿
2	<input type="checkbox"/> 現在の柔道整復師② 国家試験 <input type="checkbox"/> 現在の柔道整復師③ 外傷のとらえ方
3	<input type="checkbox"/> 柔道整復の歴史① 基本概念の成立～中世
4	<input type="checkbox"/> 柔道整復の歴史② 近世～第二次大戦後
5	<input type="checkbox"/> 柔道整復の歴史③ 公認と単独法成立 指導要領の制定 カリキュラムの高度化
6	<input type="checkbox"/> 現在の柔道整復師③ 柔道と現代的意義 業務範囲と条文 業務禁止 施術制限 権能 限界
7	<input type="checkbox"/> 現在の柔道整復師④ X線と附帯決議 医接連携 受領委任制度
8	<input type="checkbox"/> 現在の柔道整復師⑤ 説明と同意 守秘義務 医療契約の範囲 個人情報保護 <input type="checkbox"/> Q&A
9	<input type="radio"/> 期末試験
10	<input type="radio"/> 試験解説と総括 <input type="checkbox"/> 柔道整復の歴史④ これからの柔道整復師

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門基礎分野	実習	前期	1年	1	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	水村 麻輝					水村 麻輝

教科書	『柔道大辞典』アテネ書房
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	実際に柔道を実技として行い礼儀作法、受身の技術の習得。
到達目標	柔道の認定実技審査の技術の習得。
準備学習の内容	準備運動。
授業期間全体を通じた授業の進め方	実際に柔道を行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	柔道衣の着方、マナーについて
2	礼法 柔道衣の着方
3	礼法 基本動作 後受身
4	礼法 基本動作 後受身 横受身
5	礼法 基本動作 後受身 横受身 前受身
6	受身の復習
7	認定実技の流れの説明
8	受身通しでの練習
9	中間試験
10	礼法 受身 手技
11	礼法 受身 手技
12	礼法 受身 手技
13	礼法 受身 手技
14	投の形通しで練習
15	礼法 受身 腰技
16	礼法 受身 腰技
17	試験前練習
18	期末試験
19	試験解説
20	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学 I a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	通年 (前期)	1 年	4	80 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：3 年 9 か月 専門学校勤務：10 年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	解剖学 運動学 南江堂

授業の方法及び内容	教科書とスライドを用いて講義し、板書およびプリント形式で実施。
到達目標	総論、上肢の外傷の原因、症状、治療法を理解する。
準備学習の内容	教科書を用いた予習と、前回のノートの復習等
授業期間全体を通じた授業の進め方	繰り返し復習を行う。そのために小テスト・中間試験を多く実施する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は 80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100 点～80 点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79 点～70 点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69 点～60 点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59 点～0 点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100 点満点中 60 点以上合格 平常点 0 点またはマイナス 10 点		

授業計画

1	オリエンテーション 診察
2	治療法①
3	治療法②
4	外傷予防
5	鎖骨部の脱臼①
6	鎖骨部の脱臼②
7	鎖骨部の脱臼③
8	肩関節脱臼①
9	肩関節脱臼②
10	肩関節脱臼③
11	中間試験 解答解説
12	肘関節脱臼①
13	肘関節脱臼②
14	肘関節脱臼③ 肘内障
15	鎖骨骨折①
16	鎖骨骨折②
17	鎖骨骨折③
18	復習
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学 I b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	通年 (後期)	1 年	(4)	80 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：3 年 9 か月 専門学校勤務：10 年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	解剖学 運動学 南江堂

授業の方法及び内容	教科書とスライドを用いて講義し、板書およびプリント形式で実施
到達目標	上肢の外傷の原因、症状、治療法を理解する。
準備学習の内容	教科書を用いた予習と、前回のノートの復習等
授業期間全体を通じた授業の進め方	繰り返し復習を行う。そのために小テスト・中間試験を多く実施する。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は 80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100 点～80 点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79 点～70 点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69 点～60 点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59 点～0 点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100 点満点中 60 点以上合格 平常点 0 点またはマイナス 10 点
------	--

授業計画

1	前期復習 上腕骨近位端骨折①
2	上腕骨近位端部骨折②
3	上腕骨近位端部骨折③
4	上腕骨骨幹部骨折①
5	上腕骨骨幹部骨折②
6	橈骨遠位端部骨折①
7	橈骨遠位端部骨折②
8	橈骨遠位端部骨折③
9	中手骨部の骨折①
10	中手骨部の骨折②
11	中間試験 解答解説
12	中手指節関節脱臼 指節関節脱臼
13	肋骨骨折
14	腱板損傷
15	上腕二頭筋損傷
16	復習①
17	復習②
18	復習③
19	期末試験
20	解答解説

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学Ⅱa			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	通年（前期）	1年	4	80（40）
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校勤務：20年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書の内容を概説し、柔道整復理論総論に関し、解説する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席回数は80%以上		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	総論01 脱臼01 関節損傷01
2	総論02 脱臼02 関節損傷02
3	総論03 脱臼03 関節損傷03
4	総論04 脱臼04 脱臼総論01
5	総論05 脱臼05 脱臼総論02
6	総論06 脱臼06 脱臼総論03
7	総論07 脱臼07 脱臼総論04
8	総論08 脱臼08 脱臼総論05
9	総論09 脱臼09 脱臼総論06
10	総論10 脱臼10 脱臼総論07
11	総論11 脱臼11 脱臼総論08
12	総論12 脱臼12 脱臼総論09
13	総論13 軟部組織損傷07 筋損傷01
14	総論14 軟部組織損傷08 筋損傷02
15	総論15 軟部組織損傷09 筋損傷03
16	総論16 軟部組織損傷10 神経損傷01
17	総論17 軟部組織損傷11 神経損傷02
18	総論18 軟部組織損傷12 神経損傷03
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学Ⅱb			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	通年（後期）	1年	(4)	80(40)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校勤務：20年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	

授業の方法及び内容	教科書の内容を概説し、機能解剖を実施。 その後、発生機序、症状、治療法、予後の流れで解説する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画

1	上肢の骨折01 鎖骨の骨折01
2	上肢の骨折02 鎖骨の骨折02
3	上肢の骨折03 肩甲骨骨折
4	上肢の骨折04 上腕骨の骨折01
5	上肢の骨折05 上腕骨の骨折02
6	上肢の骨折06 上腕骨の骨折03
7	上肢の骨折07 前腕骨の骨折01
8	上肢の骨折08 前腕骨の骨折02
9	上肢の骨折09 前腕骨の骨折03
10	上肢の骨折10 手部の骨折01
11	上肢の骨折11 手部の骨折02
12	上肢の骨折12 手部の骨折03
13	上肢の軟損01 肩の軟損01
14	上肢の軟損02 肩の軟損02
15	上肢の軟損03 肩の軟損03
16	上肢の軟損04 肩の軟損04
17	上肢の軟損05 肘・前腕の軟損01
18	上肢の軟損06 肘・前腕の軟損02
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	基礎柔道整復学Ⅲ			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	前期	1年	2	40
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務：10年 専門学校勤務：20年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	柔道整復学・実技編

授業の方法及び内容	教科書の内容を概説し、柔道整復理論総論に関し、解説する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	総論01 骨折01
2	総論02 骨折02
3	総論03 骨折03
4	総論04 骨折04
5	総論05 骨折05
6	総論06 骨折06
7	総論07 骨折07
8	総論08 骨折08
9	総論09 骨折09
10	総論10 骨折10
11	総論11 骨折11
12	総論12 骨折12
13	総論13 軟部組織損傷01 靭帯損傷01
14	総論14 軟部組織損傷02 靭帯損傷02
15	総論15 軟部組織損傷03 靭帯損傷03
16	総論16 軟部組織損傷04 腱損傷01
17	総論17 軟部組織損傷05 腱損傷02
18	総論18 軟部組織損傷06 腱損傷03
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学 I-1			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	1年	4	80(40)
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	瑞泉 誠			接骨院等勤務:10年 専門学校勤務:20年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・理論編』南江堂
参考文献・資料等	柔道整復学・実技編

授業の方法及び内容	教科書の内容を概説し、機能解剖を実施。 その後、発生機序、症状、治療法、予後の流れで解説する。
到達目標	上記の内容を学生自身が説明することができる。
準備学習の内容	前回の内容を配布資料で確認し小テストに備える。
授業期間全体を通じた授業の進め方	前回の小テストを行い、振り返りを行った上で、教科書を中心とした授業形態とグループ学習を主体とした授業を適宜選択し行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる最低出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点~80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点~70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点~60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点~0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	上肢の脱臼01 鎖骨の脱臼01
2	上肢の脱臼02 鎖骨の脱臼02
3	上肢の脱臼03 鎖骨の脱臼03
4	上肢の脱臼04 肩の脱臼01
5	上肢の脱臼05 肩の脱臼02
6	上肢の脱臼06 肩の脱臼03
7	上肢の脱臼07 肘の脱臼01
8	上肢の脱臼08 肘の脱臼02
9	上肢の脱臼09 肘の脱臼03
10	上肢の脱臼10 手の脱臼01
11	上肢の脱臼11 手の脱臼02
12	上肢の脱臼12 手の脱臼03
13	上肢の軟損07 肘・前腕の軟損03
14	上肢の軟損08 肘・前腕の軟損04
15	上肢の軟損09 手の軟損01
16	上肢の軟損10 手の軟損02
17	上肢の軟損11 手の軟損03
18	上肢の軟損12 手の軟損04
19	期末試験
20	試験解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床柔道整復学 I - 2			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	講義	後期	1年	(4)	80 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：4年 専門学校勤務：12年		瑞泉 誠

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂、『標準整形外科学』医学書院

授業の方法及び内容	座学での講義を主体とする。教科書で学び、プリントにまとめ、学習成果を国家試験過去問題にて確認する。「自分専用にカスタマイズされた参考書を作る」ことを目標とする。
到達目標	頭部・顔面、胸部、脊椎の骨折、脱臼および軟部組織損傷について、①分類②発生機所③症状④治療法⑤合併症を患者に説明できるようになる。また該当部位の、①骨（名称）②筋（起始・停止・作用）③神経（支配領域）を何も見ずに口述することができるようになる。
準備学習の内容	①該当範囲の解剖学（骨・筋・神経）の復習、②小試験対策、③授業予定範囲の教科書先読みを基本とした、自宅学習を習慣づける。
授業期間全体を通じた授業の進め方	単元毎に小試験を実施し、学習到達度を確認する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中60点以上合格 平常点 0点またはマイナス10点		

授業計画 臨床柔道整復学 I-2 (後期)

1	オリエンテーション (シラバス、授業の進め方、評価方法)・該当部位の解剖
2	1-1 頭部、体幹の骨折 A 頭部、顔面部の骨折 (頭蓋骨骨折・顔面頭蓋骨折)
3	1-1 頭部、体幹の骨折 B 頸椎の骨折 (上位頸椎骨折・中、下位頸椎骨折)
4	1-1 頭部、体幹の骨折 C 胸椎の骨折 (上部胸椎棘突起骨折・胸椎の椎体骨折)
5	1-1 頭部、体幹の骨折 D 腰椎の骨折 (下位腰椎椎体圧迫骨折・チャンス骨折・腰椎椎体破裂骨折・腰椎肋骨突起骨折)
6	1-1 頭部、体幹の骨折 E 胸部の骨折① (肋骨骨折・肋軟骨骨折・胸骨骨折)
7	1-1 頭部、体幹の骨折 E 胸部の骨折② (肋骨骨折・肋軟骨骨折・胸骨骨折)
8	2-1 頭部、顔面の脱臼 A 顎関節脱臼① (前方脱臼・後方脱臼・側方脱臼)
9	2-1 頭部、顔面の脱臼 A 顎関節脱臼② (前方脱臼・後方脱臼・側方脱臼)
10	中間試験
11	2-1 頭部、顔面の脱臼 B 頸椎脱臼 (環軸関節の脱臼および脱臼骨折・下位頸椎の脱臼および脱臼骨折)
12	2-1 頭部、顔面の脱臼 C 胸椎の脱臼 (胸椎部脱臼骨折・胸腰椎移行部脱臼骨折) 2-1 頭部、顔面の脱臼 D 腰椎の脱臼
13	3-1 頭部、体幹の軟部組織損傷 A 頭部、顔面部の軟部組織損傷① (頭部、顔面部打撲、顎関節症・外傷性顎関節損傷)
14	3-1 頭部、体幹の軟部組織損傷 A 頭部、顔面部の軟部組織損傷② (頭部、顔面部打撲、顎関節症・外傷性顎関節損傷)
15	3-1 頭部、体幹の軟部組織損傷 B 頸部の軟部組織損傷① (外傷性頸部症候群・胸郭出口症候群・寝違え)
16	3-1 頭部、体幹の軟部組織損傷 B 頸部の軟部組織損傷② (外傷性頸部症候群・胸郭出口症候群・寝違え)
17	3-1 頭部、体幹の軟部組織損傷 C 胸・背部の軟部組織損傷 (胸肋関節損傷・肋間筋損傷・胸背部打撲・背部の軟部組織損傷)
18	3-1 頭部、体幹の軟部組織損傷 D 腰部の軟部組織損傷 (関節性・靭帯性・筋、筋膜性)
19	期末試験
20	解答および解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技 I a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	前期 (後半)	1 年	2	60 (20)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：3 年 9 か月 専門学校勤務：10 年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。
到達目標	(1) 肩関節前方脱臼の診察及び整復法が出来る (2) 肩関節前方脱臼の固定が出来る (3) 肩鎖関節上方脱臼の診察及び整復法が出来る (4) 肩鎖関節上方脱臼の固定が出来る
準備学習の内容	(1) 上肢の機能と解剖を理解できる
授業期間全体を通じた 授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は 80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100 点～80 点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79 点～70 点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69 点～60 点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59 点～0 点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。

評価方法	定期試験 100 点満点中 60 点以上合格 平常点 0 点またはマイナス 10 点
------	--

授業計画

1	オリエンテーション 診察
2	肩関節前方脱臼 整復
3	肩関節前方脱臼 固定
4	肩関節前方脱臼 固定
5	肩鎖関節上方脱臼 整復
6	肩鎖関節上方脱臼 固定
7	肩鎖関節上方脱臼 固定
8	復習
9	期末試験
10	解答解説

授業計画書

基本情報	科目名称	柔道整復実技 I b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	後期	1年	(2)	60 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	勝村 由香			接骨院等勤務：3年9か月 専門学校勤務：10年		勝村 由香

教科書	『柔道整復学・実技編』南江堂
参考文献・資料等	『解剖学』南江堂

授業の方法及び内容	柔道整復師に必要な診察・整復・固定について学ぶ。 材料作成から行い、柔道整復術について理解を深める。
到達目標	(1) 肘関節後方脱臼の診察及び整復法が出来る (2) 肘関節後方脱臼の固定が出来る (3) 肘内障の診察及び整復法が出来る (4) 鎖骨骨折の診察及び整復法が出来る (5) 鎖骨骨折の固定が出来る (6) 上腕骨外科頸骨折の診察及び整復法が出来る (7) 上腕骨骨幹部骨折の固定が出来る (8) コーレス骨折の診察及び整復法が出来る (9) コーレス骨折の固定が出来る (10) 中手骨頸部骨折の固定が出来る (11) PIP 関節背側脱臼の固定が出来る
準備学習の内容	(1) 肩関節部の機能と解剖を理解できる (2) 鎖骨部の機能と解剖を理解できる
授業期間全体を通じた授業の進め方	グループを作成し、患者・助手・術者を順番に担当する。 授業毎に理解度を確認するため、グループで発表する。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験 100点満点中 60点以上合格 平常点 0点またはマイナス 10点		

授業計画

1	肘関節後方脱臼 整復
2	肘関節後方脱臼 固定
3	肘関節後方脱臼 固定
4	肘内障
5	鎖骨骨折 整復
6	鎖骨骨折 固定
7	鎖骨骨折 固定
8	上腕骨外科頸骨折 整復
9	上腕骨外科頸骨折 整復
10	上腕骨骨幹部骨折 固定
11	中間試験
12	コーレス骨折 整復
13	コーレス骨折 固定
14	コーレス骨折 固定
15	中手骨頸部骨折 固定
16	PIP 関節背側脱臼
17	復習
18	期末試験
19	解答解説
20	総復習

授業計画書

基本情報	科目名称	包帯実技 a			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	前期	1年	2	60 (40)
	授業担当者 (所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	秋本 寛			接骨院等勤務：12年11か月 専門学校勤務：0年1か月		秋本 寛

教科書	『包帯固定学』南江堂
参考文献・資料等	柔道整復師実技編

授業の方法及び内容	各包帯法を教科書で確認後、講師が見本を見せた後に各組で相手を患者に見立てて練習を行う。
到達目標	基本包帯法と冠名包帯法の意義を理解したうえで、素早くきれいに巻くことができる。
準備学習の内容	教科書・包帯など固定具の準備
授業期間全体を通じた授業の進め方	復習に重きを置き、相手を変えながら太さや形状の違う患部に繰り返し練習を行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	ガイダンス・道具の名称・環行帯・螺旋帯・包帯の巻き戻し
2	足関節の包帯固定
3	足関節の包帯固定2
4	足関節のテーピング固定
5	手関節・折転帯・亀甲帯
6	各関節の運動の方向と機能的肢位
7	各関節の運動の方向と機能的肢位
8	中間試験・肩関節麦穂帯
9	肩関節麦穂帯+三角巾
10	肩関節麦穂帯(左)
11	デゾー包帯
12	デゾー包帯2
13	デゾー包帯3・ヴェルポー包帯
14	ジュール包帯
15	試験前練習
16	試験前練習
17	期末試験前半
18	期末試験後半
19	総評
20	ギブス

授業計画書

基本情報	科目名称	包帯実技b			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	後期（前半）	1年	(2)	60 (20)
	授業担当者（所属・職名）			実務経験		成績評価責任者
	秋本 寛			接骨院等勤務：12年11か月 専門学校勤務：0年1か月		秋本 寛

教科書	『包帯固定学』南江堂
参考文献・資料等	柔道整復師実技編

授業の方法及び内容	各包帯法を教科書で確認後、講師が見本を見せた後に各組で相手を患者に見立てて練習を行う。
到達目標	基本包帯法と冠名包帯法の意義を理解したうえで、素早くきれいに巻くことができる。
準備学習の内容	教科書・包帯など固定具の準備
授業期間全体を通じた授業の進め方	復習に重きを置き、相手を変えながら太さや形状の違う患部に繰り返し練習を行う。

評価前提条件	単位認定に必要となる出席率は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	頭部
2	手指
3	手指・プライトン
4	頭部・手指チェック1
5	頭部・手指チェック2
6	頭部・手指チェック3
7	前期復習
8	後期復習
9	期末試験（筆記）
10	試験総括・解説

授業計画書

基本情報	科目名称	臨床実習 I			履修区分	必修
	科目区分	授業形態	開講時期	学年	単位数	授業時間数
	専門分野	実習	前期	1年	1	45
	授業担当者(所属・職名)			実務経験		成績評価責任者
	小田 敏明			接骨院等勤務：4年 専門学校勤務：12年		小田 敏明

教科書	『柔道整復学・理論編・実技編』南江堂
参考文献・資料等	臨床実習ガイドライン

授業の方法及び内容	講義は実習形式で臨床実習指導者の指示に従って実施する。臨床実習に臨む際の心構えを体得し、到達目標を達成する。また、臨床実習Ⅱ（見学型）に継げるための準備（導入）を学ぶ。
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・ 施術所で患者に不快感を与えない身だしなみ（服装、頭髪、爪、化粧等）を整えることができる。 ・ 施術者に相応しい挨拶（自己紹介）ができる。 ・ 施術所で患者に不快感を与えない態度、適切な言葉づかいができる。 ・ 守秘義務・個人情報について説明ができる。 ・ 医学的な清潔の意味が説明できる。 ・ 施術所の清潔保持の重要性について説明ができる。 ・ 施術所等では、どのような患者の施術を行っているか、どのような業務を行っているか述べられる。 ・ 関節運動について理解している。 ・ 各関節の運動方向について説明できる。
準備学習の内容	個別の学習目標を設定した上で、達成するための具体的なプランを立案する。また、修学範囲の復習を事前に行い、実際の臨床実習現場で対応できるように準備をしておく。
授業期間全体を通じた授業の進め方	臨床実習指導者の指示に従って行動し、内容は毎日デイリーノートに記録する。中間および最終日に自己評価を行い学習目標の到達度を確認する。実習終了後には、実習終了後の振り返り、症例報告と共に期限までに提出する。

評価前提条件	単位認定に必要な最低出席回数は80%以上。		
成績評価基準	評価	評価基準	評価内容
	優	100点～80点	特に優れた成績を表し、到達目標を完全に達成している。
	良	79点～70点	優れた成績を表し、不十分な点は認められるもの到達目標をほぼ達成している。
	可	69点～60点	合格と認められる最低限の成績を表し、到達目標の最低限は満たしている。
	不可	59点～0点	合格と認められる最低限の成績に達しておらず、到達目標を充足していない。
評価方法	定期試験100点満点中60点以上合格 平常点0点またはマイナス10点		

授業計画

1	学外 見学型臨床実習①
2	学外 見学型臨床実習②
3	学外 見学型臨床実習③
4	学外 見学型臨床実習④
5	学外 見学型臨床実習⑤
6	学外 見学型臨床実習⑥
7	学外 見学型臨床実習⑦
8	学外 見学型臨床実習⑧
9	学外 見学型臨床実習⑨
10	学外 見学型臨床実習⑩
11	学外 見学型臨床実習⑪
12	学外 見学型臨床実習⑫
13	学外 見学型臨床実習⑬
14	学外 見学型臨床実習⑭
15	学外 見学型臨床実習⑮
16	学外 見学型臨床実習⑯
17	学外 見学型臨床実習⑰
18	学外 見学型臨床実習⑱
19	学外 見学型臨床実習⑲
20	学外 見学型臨床実習⑳
21	学外 見学型臨床実習㉑
22	学外 見学型臨床実習㉒
23	学外 見学型臨床実習㉓